

〈ドラッカーが渋沢栄一について言及している箇所〉

ドラッカーが渋沢栄一について言及している箇所は『渋沢栄一とドラッカー 未来創造の方法論』（KADOKAWA）の第1章で触れましたが、それ以外では次のような箇所があります。

1. 『マネジメント 務め、責任、実践』 P.F. ドラッカー著、有賀裕子訳、（日経 BP 社）

「明治時代の初期から中期にかけて、つまり一九〇〇年以前に活躍した渋沢栄一、あるいは第一次大戦前のドイツで活躍したヴァルター・ラーテナウらは、企業と社会、とりわけ大企業と社会との関係について、幅広い論説を展開した。ただし、渋沢やラーテナウですら、主に心を砕いたのは、企業の活動にいかん制約を加えるか、企業と経営者をいかに社会や地域の価値観に添わせるか、ということだった。」

2. 『イノベーションと企業家精神』 P.F. ドラッカー著、小林宏治監訳、上田惇生＋佐々木実智男訳、（ダイヤモンド社）

「そして、遠く離れた東京にもう一人の若者、渋沢栄一がいた。彼は、日本人としてはじめて銀行業を勉強するためにヨーロッパを訪れ、パリと、ロンドンのロンバード街で過ごした。その後、彼は日本式のユニバーサル・バンクを創設し、近代日本経済の基礎を築き上げた者の一人として数えられるようになった。今日、ジーメンスのドイツ銀行も、渋沢の第一銀行もともに、それぞれの国で最大規模の銀行になっている。」

「社会的な知識にもとづくイノベーションを行う場合にも、同じ分析が必要である。J・P・モルガンやゲオルグ・ジーメンスは何も書かなかつたが、渋沢は書き物を残している。そこからわれわれは、渋沢がなぜ政府における経歴を捨てて、銀行を創設したかがわかる。彼は、利用できる知識と必要な知識を十分に分析した上で、銀行をつくったのである。」

「一〇〇年前に、J・P・モルガンは『重点占拠戦略』を選んだがうえに、ヨーロッパの資本をアメリカあるいは資本不足の国に投資させるパイプ役となる銀行を設立したのである。同じときに、ドイツのゲオルグ・ジーメンスと日本の渋沢栄一は『システム戦略』の道を選んでいた。」

3. Peter F・Drucker “Ecological Vision” Transaction Publishers, 1992

「In Japan, Shibusawa Eiichi, who had left a promising government career in the 1870s to construct a modern Japan through building business, also saw in the business enterprise something quite new and distinctly challenging. He tried to tame it by infusing it with the Confucian ethic; and Japanese big business as it developed after World War II is very largely made in Shibusawa's image.」

(注記) “The Ecological Vision” の日本語版は『すでに起こった未来』(ダイヤモンド社) ですが、この本は “The Ecological Vision” の抄訳版であり、『すでに起こった未来』に上記の文章の日本語訳はありません。日本語に訳せば次のような感じでしょうか。

「日本では、事業を興すことを通して近代日本を建設するために、1870 年代に約束された政府の職を捨てた渋沢栄一が、同じように事業会社の中に何か全く新しく本当に挑戦的なものを見ていた。彼は事業会社に儒教の道徳を吹き込むことによって、事業会社を人間の役に立つようなものにしようとした。そして、戦後の日本の大企業は、渋沢がイメージしたように発展していったのだった。」

4. 『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』2010 年 6 月号「P.F. ドラッカー-HBR 全論文集」の中の「イノベーションの機会」

「日本の若者、渋沢栄一がシーメンスの考えを導入し、日本に近代経済の基礎をつくった。これが、知識に基づくイノベーションのプロセスの典型である。」

文責：國貞克則